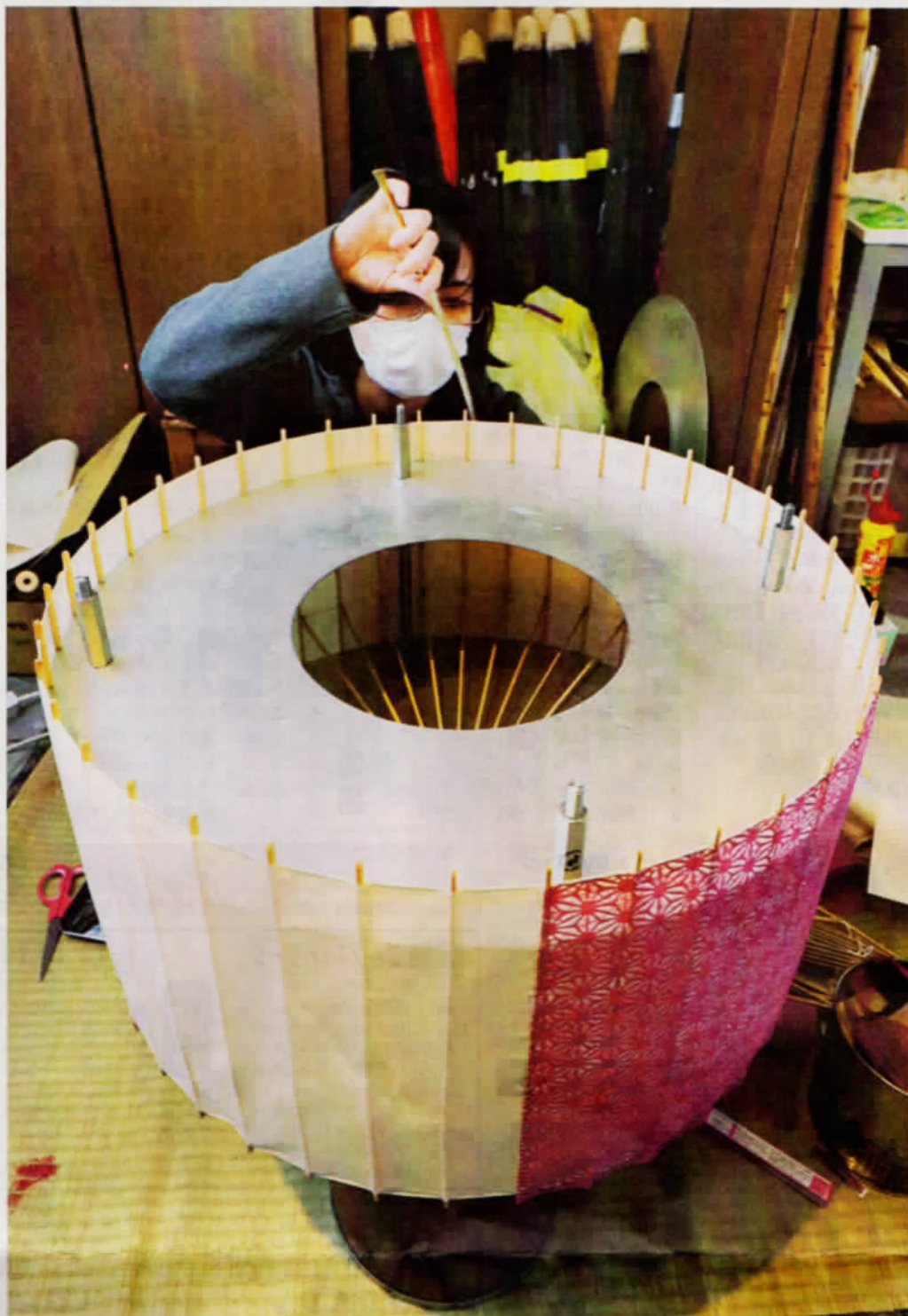


和の光 支える和傘の粋

日吉屋の照明 (京都市上京区)



骨組みを回転させながら、和紙を貼り合わせていく

ここに技あり

休め「制作の技術は和傘とほとんど同じです」と教えてくれた。

ステンレス製の円い型の外周に沿って、竹製の骨を一本ずつ垂直に組んでいく。直径は約50センチ。40本で円筒を形成する。骨ののりを塗り、円筒の側面に和紙を貼る。カミソリで余分な紙を切り落とす。松本光彩さん(29)の流れるような手作業で和風照明が生み出されていく。一瞬だけ手を

京都府の真ん中を南北に貫く堀川通を折れてすぐ。寺院や茶道関連の商店も集まる閑静な住宅街の一角に和傘の老舗、日吉屋の店舗兼工房がたたずむ。江戸末期から160年の歴史を誇り、多くの同業が廃業した現在、市内唯一の和傘の製造元だ。職人は松本さんを含め2人、他に見習い2人が制作に励む。

竹と和紙が織りなす造形の美。色彩も多様だ。和風照明は構造も和傘とほぼ同じ。和傘の竹製の骨組みのうち、外側の和紙を貼る竹材を親骨と呼ぶ。一方、内側で一本ずつ親骨と接続し、軸をスライドすることで開閉を可能にする竹材を小骨という。

数十本の親骨で円すい形を形成する和傘に対し、和風照明は円筒形を形成する。小骨も和傘は小さな逆円すい形だが、和風照明は完全な円となつて円筒の底となる。どちらも同じ要領で開閉できるのが面白い。

日吉屋は伝統的な和傘の制作技術を使いつつ、全く新しい和風照明として注目された。2014年に堀川沿いにオープンした外資系高級ホテル、ザ・リッツ・カールトン京都などに納入された実績を持つ。今や売り上げの7割以上を占め、海外からの注文も多い。

なぜ和傘の老舗が照明なのか。西堀耕太郎社長(43)は「和傘の歴史を知れば納得してもらえるのでは」と話す。和傘は奈良時代に原形が中国から伝わり、魔よけや高貴な身分、権威の象徴などとして長く用いられた。開閉できる雨具として定着したのは江戸中期になってからだ。「雨具としての機能で洋傘に到底かなわない以上、和風照明に進

カメマン ひんがし

工房の床には材料や工具、作りかけの照明が所狭しと並ぶ。踏みつけてしまつては、取り返しがつかない。抜き足差し足で動き回り、円い形状と職人の動作がよく見える位置でレンズを向けた。骨組みを回しながら、白い和紙の上に赤い柄の和紙を貼っていく職人。2色の継ぎ目が目立つタイミングを待って、シャッターを切った。

化して生き残ることができないかと考えました」

西堀さんが完成した和傘を近くの寺院の境内で天目干ししていると、日光が和傘の和紙越しに透けて見えた。青い空の下で幻想的な美しき。これに想を得て、和風照明に行き着いた。インターネットや口コミで評判が広がり、廃業寸前だった同社の業績は急回復した。

戦後、洋傘の普及で和傘は衰退し、土産物やインテリアとして細々と流通するだけだが、長い年月で培われた伝統の技は新たな命を吹き込み、京都の地でやわらかな光を生み出している。

文 大阪・文化担当 田村広済
写真 淡嶋健人

電子版で関西のニュース
まとめ読み▼地域・関西